

音変化と主母音—北宋～金の韻文より—

吉池孝一

はじめに

私は1982年9月から1983年7月まで中国復旦大学に留学した<sup>①</sup>。1983年に留學生活の締め括りとして、義務ではなかったが、入声に関わる中国語の文章を書き、許宝華先生に提出した<sup>②</sup>。帰国後の1984年、東京都立大学大学院の受験に際して、その文章の要旨を「音変化と主母音—北宋～金の韻文より—」と題して提出した。

都立大の大学院修士課程に入学の後、指導教員の慶谷寿信先生が『蒙古字韻』を利用して入声韻尾の消失と主母音との関係を論じていることを知り、冷や汗が流れた。音韻にかかわる日本語の文献は藤堂明保氏の『中国語音韻論—その歴史的研究—』(1980年、光生館)しかみておらず、中国語の文献も当時中国の書店で入手できたものしか利用していない。無知ゆえの大胆さをもって書いたものである。そういう経緯であったため、その後は表に出す気にはなれず、この要旨は38年間、書架の片隅に眠っていた。最近、月刊で発行している『KOTONOHA』の原稿の筆が進まず呻吟していたおり、この要旨のことを思い出した。定年退職後の終活の一つとして、ほこりをかぶった手書き(当時ワープロは一般的ではなかった)の文章を、そのままワープロで打ちだし形にするのも悪くはないか、との思いに至った。なお、注と参考書目の前に付した手書きの図1～5は原文をスキャナーで取り込んで利用したものである。

---

① 専門学校日中学院の紹介で中国に留学し(1981年9月～1983年7月)前半の一年は北京語言学院(後の北京語言文化大学)で過ごし、後半の一年は上海の復旦大学で過ごした。

② 復旦大学では、中国人学生用の中国語音韻史と方言調査の講義にでた。方言調査では、上海語研究の第一人者であった許宝華教授の指導のもと、研究生の石汝傑さん(のちに呉方言の研究者として活躍)等とともに、上海市の郊外に出向いて調査を行なった。その調査をとおして、方言の調査方法と調音音声学の基礎を学んだ。郊外の上海語には、母音ア(a)が2種、母音エ(e)が3種あった。このような区別は日本語にはないので、おおいに困惑した。その後、留學生活最後の締め括りとして、音韻にかかわる文章を書いて許宝華先生に提出し見ていただいた。

音変化と主母音—北宋～金の韻文より—

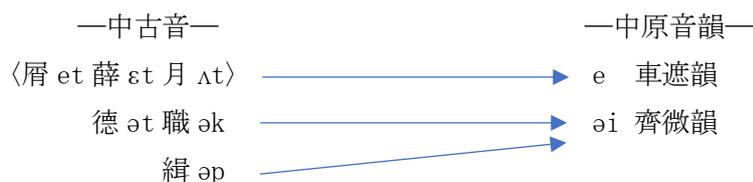
宋元は、北方の音韻史が〈古官話〉の特徴を確立するうえで重要な時代である。特に入声に於ける変化は著しく、宋代に内破音韻尾-p, -t, -k が-ʔ化し、元明にかけて〈調類〉そのものが消失した。本レポートでは、北宋と金の古体詩の入声字による押韻例を比較し、更に「詞林正韻」、「中原音韻」を参考として音変化と主母音の関係に言及する。

さて北宋の邵雍「皇極經世書・正声正音総図」では-t, -k 韻尾の入声は〈陰類〉に配置され、韻尾消失を暗示する。更に唐宋以来の〈詞〉に基づき編纂された清の戈載「詞林正韻」では-p, -t, -k の消失が伺える。まず韻文を検討し実際の状況のみてみたい。北宋、北方出身の8詩人の詩のうち、入声で押韻した69首を「詞林正韻」の韻目分類を参考にしつつまとめてみた(図1)。図2は「詞林正韻」の押韻状況である。北宋の押韻傾向はほぼ「詞林正韻」と一致する。-p, -t, -k 韻尾の〈混押〉(三種の韻尾の通押を以下〈混押〉とする)は韻尾消失を示す。図1で注目したいのは、山撰及び臻撰の各韻が二分することである。以下押韻例を示す。

■山撰内の〈屑薛月〉韻だけが「詞林正韻」と一致しない変則的な〈混押〉を示し〈黠鎋曷末〉韻とは押韻傾向を異にする。

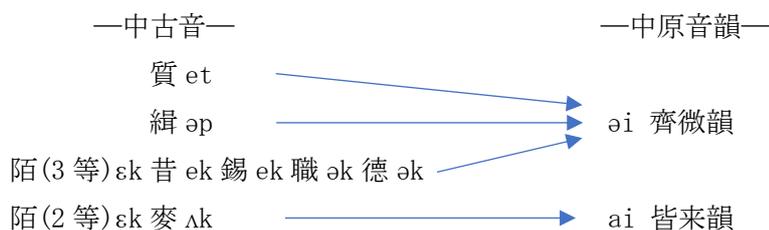
- [例] 1. 沒(臻撰・沒韻)窟(臻・沒)裂(山・薛)決(山・屑)血(山・屑)孽(山・薛)羯(山・月)熱(山・薛)北<sup>1)</sup>(曾・德)——蘇舜欽、卷二吾聞  
 2. 竭(山・月)德(曾・德)色(曾・職)——陳與義、難老堂周元公家  
 3. 及(深・緝)忽(臻・沒)絶(山・薛)月(山・月)——陳與義、夢中送僧覺

これら北印は「中原音韻」で全て齊微韻となる。主母音と韻尾の〈音価〉<sup>2)</sup>を比較すると：



この音変化の流れの中で音的類似性を見出し上例の如き〈混押〉が可能となった。このような〈屑薛月〉韻グループの活発な動きは、本韻が〈黠鎋曷末〉よりも早期に音変化が開始されたことを示す。

■臻撰内は「詞林正韻」及び金・元好問の押韻では〈沒物迄〉韻と〈質術櫛〉韻に二分されるが、北宋では両者の絆はむしろ強く(図3)、分離への音変化の反映はみられない。又ひとり質韻のみ多数の〈混押〉例がある。この2点は質韻が〈沒物術〉韻よりも早期に、以下の如き音変化を開始したことを示す。



職(齒上音)ək → i 支思韻

※【陌(3等)のəkは主母音と韻尾のみを書いたものであろう】

とすると、上記の7韻も質韻と共に比較的早期に〈古官話〉への傾斜を起したことになる。又「正声正音総図」では-p韻尾の入声は〈陽類〉に配置されているが、図1の緝韻の動行より、すでに韻尾崩壊が認められる。

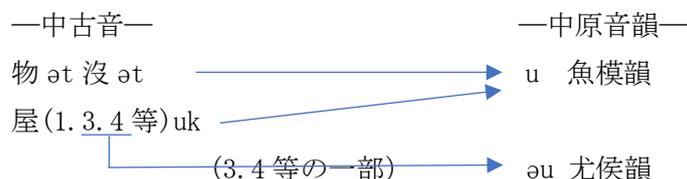
次に、金代の元好問(1190年～1257年)の古体詩に言及する。彼は「中原音韻」の約百年前、前述の北宋詩人達の約百年後に位置する。古体詩223首中、48首の入声による押韻例があり、その押韻傾向は「詞林正韻」をよく反映しているが、新しいタイプの押韻が三つ出現した(図4)。以下例示する。

第1. 屋韻と沒物韻の〈混押〉がみられる。

[例] 4. 禿(通・屋)沒(臻・沒)鏹(通・屋)——卷四、過晉陽故城書事

5. 絛(臻・物)汨(通・屋)物(臻・物)——卷四、雲巖

北宋では屋韻、沒物韻に顕著な〈混押〉は認められず、同撰の質韻のみが活発な〈混押〉を示していたが、金代に至り様相は一変した。



第2. 従来の梗曾撰と緝韻、質韻の〈通押〉の系列(図2の通押関係③)に、新たに物韻と迄韻が加わった。

[例] 6. 石(梗・昔)尺(梗・昔)臆(曾・職)泣(深・緝)實(臻・質)必(臻・質)惜(梗・昔)

一(臻・質)識(曾・職)北(曾・德)屈(臻・物)——卷三、虞坂行

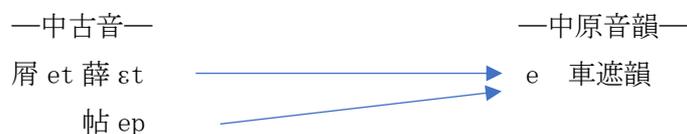
7. 席(梗・昔)覓(梗・錫)泣(深・緝)碧(梗・陌)乞(臻・迄)織(曾・職)匹(臻・質)

溼(深・緝)——卷四、贈答張教授仲文

[例] 5の押韻字「絛・物」と[例] 6の「屈」は物韻の活発な動き、つまり音変化を示す。[例] 7の「乞」字はどうであろうか。北宋及び金の117首中、迄韻字の出現例は本例のみである。迄韻の使用頻度は非常に低く、[例] 7が新しいタイプの押韻傾向であるとは断定し難い。ちなみに同撰の櫛韻は117首中0例である。

第3. -p韻尾をもつ咸撰の帖韻と山撰の屑薛韻との〈混押〉例がみられる。以下、一例のみであるが「詞林正韻」の押韻法と一致する故、信頼できる例である。

[例] 8. 絶(山・薛)雪(山・薛)帖(咸・帖)拙(山・薛)血(山・屑)——卷三、宛丘歎



韻尾消失を条件に問題なく押韻可能であるが、咸摂も迄韻と同様に押韻例が少ないので、新しいタイプの押韻傾向とは断定し難い。

さて、ここで比較的早期に音変化が起った〈麥陌昔錫質緝德職屑薛月〉韻と遅い〈屋物沒術末黠鎋曷〉韻、及び〈迄帖〉韻を主母音と韻尾に注目しつつ比較してみた(図5)。〈麥…月〉韻では、中古音で主母音が前舌及び中舌であり、中原音韻でも前舌及び中舌であり、更に主母音に“前より”の影響を与える韻尾 i を伴っている。〈屋…曷〉韻では、中古音で主母音が後舌及び中舌であり、中原音韻では後舌及び中舌であるが、家麻韻に統合される前舌広母音も含まれている。

以上、若干の例外もあるが北宋及び金の押韻資料によると入声での音変化は主母音の舌の前後と関係がありそうである。主母音に前舌要素を含む音節は後舌要素を含む音節よりも早期に音変化が開始された。さて、残る〈迄〉韻は中舌主母音であるが齊微韻に統合され、〈帖〉韻は前舌主母音を持ち車遮韻に統合される。とすると、上記の結論より、この2韻の音変化は比較的早期に起っており、所謂〈混押〉が可能になっていたと思われる。

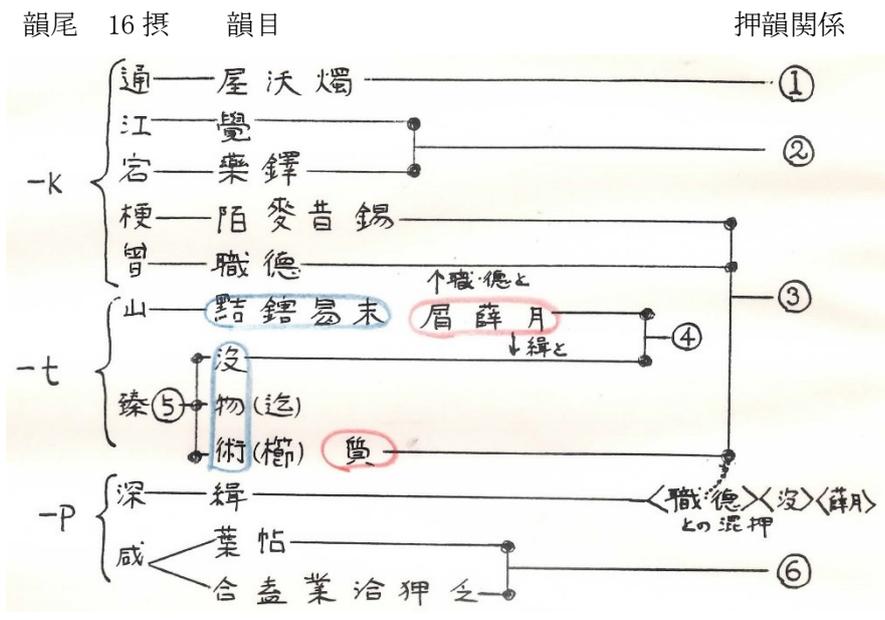


図1. 北宋の押韻

蘇舜欽・邵雍・韓維・程頤・尹洙・宋庠・陳與義・宋祁

蘇舜欽を中心にまとめた。外7人の押韻例は周祖謨「宋代汴洛語音考」中の例を参考とした。

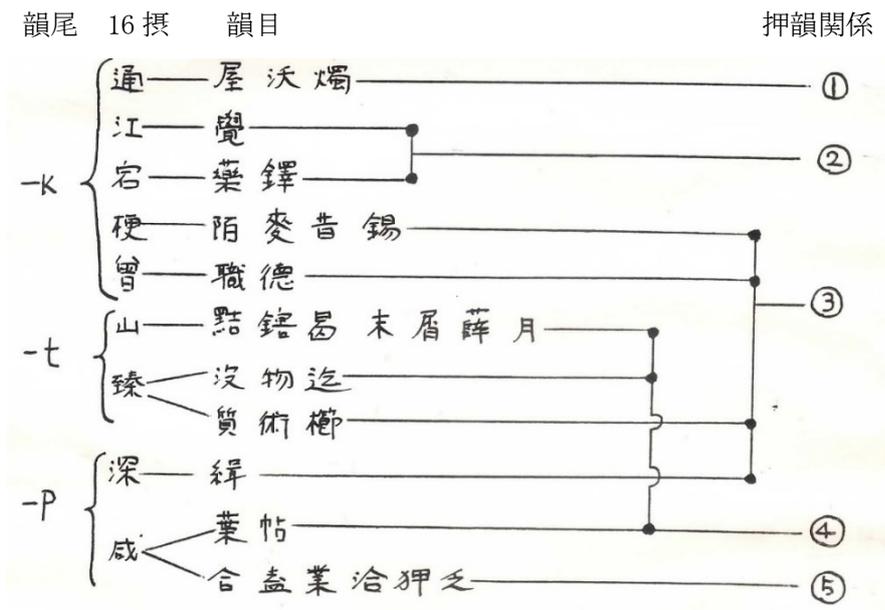


図2. 「詞林正韻」の押韻

史存直『漢語語音史綱要』の図案による

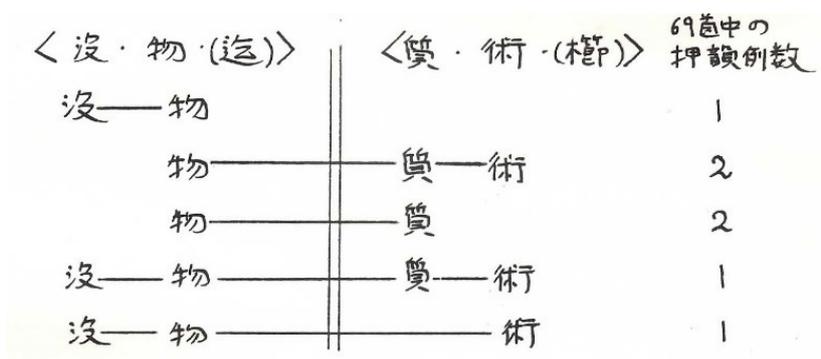


図3. 臻摂の押韻関係

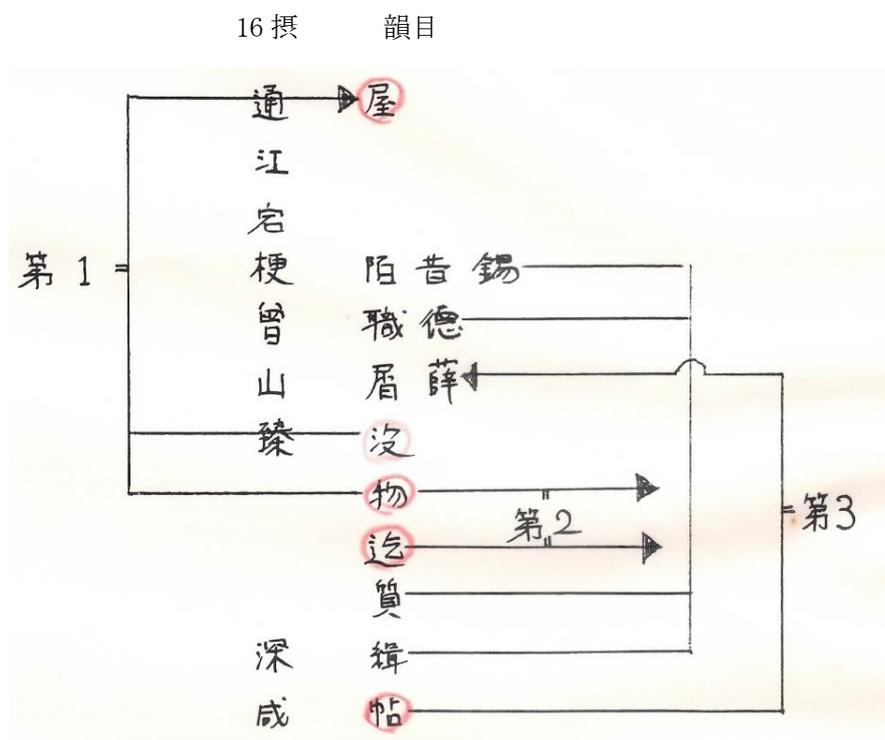


図4. 金代・元好問の新しいタイプの押韻

< 早期に音変化 >

(王力の推定音)	— 中古音 —	— 中原音韻 —
æ	麥	ʌk
ɐ	陌 (2等)	ɛk
ɔ	陌 (3等)	ɛk
ɛ	昔	ɛk
e	錫	ɛk
ě	質	et
ĕ	緝	əp
ə	德	ək
ə	職	ək
ə	職 (齒上音)	ək
e	屑	et
ɛ	薛	ɛt
ɐ	月	ʌt

→ ai 苔來韻

→ əi 齊微韻

→ ɪ 支思韻

→ e 車遮韻

< 遲..時期に音変化 >

u	屋 (3.4等)	uk	→ əu	尤侯韻
u	屋 (1.3.4等)	uk	}	→ u 魚模韻
ə	物	ət		
ə	沒	ət		
iuě	術	iuet		
a	曷 (舌根音)	at	}	→ ɔ 歌韻
a	末	uat		
æ	黠	ʌt	}	→ a 家麻韻
a	鎋	ɛt		
a	曷 (舌齒音)	at		
ə	迄	ət	→ əi	齊微韻
e	帖	ep	→ e	車遮韻

図 5. 音変化と主母音

## 注

- 1) 使用したテキストは清康熙中商塾校定震澤徐惇復刊印本を底本としており、底本によると「北」は「闕」(山攝・月韻)だが、清呉縣黄丕烈過録長洲何焯校本及び海寧陳乃乾過録何焯校本では「北」となっている。本テキストは後2者に拠った。
- 2) 推定音価はすべて『中国語音韻論—その歴史的研究—』藤堂明保(1980年、光生館)によった。介音及び韻尾の j, w は i, u とした。

## 参考書目

- 『蘇舜欽集』沈文倬點校(1981年、上海古籍出版社)  
『陳興義集』呉書蔭・金德厚點校(1982年、中華書局出版社)  
「宋代汴洛語音考」周祖謨(『問學集』1981年、中華書局出版社)  
『元遺山詩注』四部備要影印本  
『詩林正韻』清・戈載撰(1981年、上海古籍出版社影印本)  
『中国語音韻論—その歴史的研究—』藤堂明保(1980年、光生館)  
『漢語史稿上』王力(1980年、中華書局出版社)  
「漢語史語音篇」史存直(『漢語語音史綱要』1978年、復旦大学油印本)